

ユニバーサルデザインガイドライン素案に対する意見と反映状況一覧（専門家）

No.	掲載場所	頁	意見	ガイドラインへの反映
1	引き算の発想を意識する	7	タイトルで「増やさない」と言い切ると、数で対応することが悪いかのような印象を与えるのではないか。	・タイトルから「増やさない」という表現を削除した。 ・少なければよいと誤解をされないように、本文を「最適」という表現に変更した。
2	引き算の発想を意識する	7	「見渡せる空間である場合、サインは不要」という記載があるが、ちょっと言い過ぎな感がある。	・記載を削除した。
3	引き算の発想を意識する	8	引き算と足し算のデザインをグラフィックを用いてわかりやすく説明できると良い。	・写真を用いて、引き算（マイナス）と足し算（プラス）のデザインの違いを分かりやすく示した。
4	取り組みの姿勢	8	ユニバーサルデザインは、絶えず改善を進めていくという取組であることから、「取り組みの姿勢」に最適解を模索するというような記載があると良い。	・「継続的に考える」の項目に、「改善を進め、実践し続けるプロセスが重要」と記載した。
5	基本的な考え方	9	快適性だけでなく、安全面の配慮も大切である。	・基本的な考え方のひとつに「安全性」を記載した。
6	基本的な考え方	10	安全性の考え方では、使い方を間違わえないためのサインと、間違ってももとに戻れるという視点が大切。	・「安全性」の説明文に記載した。
7	基本的な考え方	10	「安全性」の中に、災害時における避難誘導サインの重要性についても記載すると良い。	・「安全性」の説明文に記載した。
8	利用者の属性	14	利用者の一人として、子どもへの配慮ポイントを増やせると独自性が出るかもしれない。	・「利用者の属性」に子どもを記載した。
9	利用者の属性	13	自閉症の方は、文字が揺れて見えたり、漢字やアルファベットの縦や横のみが目に入ってくるため、文字を読むと酔ってしまうこともある。あやや先生のことですと探すと困りごとがわかるかもしれない。	・事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。

No.	掲載場所	頁	意見	ガイドラインへの反映
10	利用者の属性	13	エビデンスはないが、例えば高齢者は視野が狭く、低くなる傾向がある。そのような利用者の属性に合わせた具体的な対応策がわかると取り組みやすいのではないか。	・事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。
11	サインの配置	14	サインの情報提供は、起点・分岐点・終点の3種類しかない。あとは、施設の構造にあわせて、どのように、どのような情報を伝えるかだけである。	・サインの配置において、「配置の種類」や「取付方法」、「自然な姿勢」などについて記載した。 ・具体的な内容については、事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。
12	現実的な場面を想定する	15	サインの背景や光の当たり具合などにより、サインの見え方などが変わるため、実際の空間を意識したり、試作品を実際の建物に置いて確認することが重要である。	・「現実的な場面を想定する」という項目を設けて、空間の中にあるサインということを意識したり、実際の施設で試してみたりすることの重要性を記載した。
13	掲示板を設置する	16	掲示板の設置は、個別に考えるのではなく、サインの全体計画に組み込む必要がある。	・「サインの配置」に「掲示板を設置する」という項目を設け、掲示板の必要性や設置にあたっての配慮事項を記載した。
14	サインの取付方法を選択する	17	突出型のサインは、光を当てにくいという特性がある。	・特性を受け、「突出型」の配慮するポイントを記載した。
15	サインの取付方法を選択する	18	サインの取付方法の一つとして、「置き型」を追加してはどうか。なお、置き型は、主にカウンターなどの上に設置するため、チラシやパンフレットにまぎれて見にくくなるので注意が必要である。	・サインの取付方法の一つとして、「置き型」を記載した。 ・注意事項を受け、「置き型」の配慮するポイントを記載した。
16	サインの掲出位置	19	板橋区は子ども目線を大切にしているので、「サインの掲出位置」の図に10歳くらいの子どものを入れたりすることで独自性が出るかもしれない。	・サインの掲出位置を示す図に子どものシルエットを追加した。

No.	掲載場所	頁	意見	ガイドラインへの反映
17	サインの種類を選択する	20	誘導サインとして使用する矢印の向きについて、例えば、前を意味する上向きの矢印が、知的障がい者にとっては上を向くというように理解されるので、注意する必要がある。	・事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。
18	サインの伝達方法を選択する	21	サインに掲載する情報量を抑制するという意味では、デジタルを活用するという視点はある。また、高次脳障害があると、情報を保持できる時間が一時であるから、デジタルの活用は良いと思う。	・デジタルサイネージについて記載した。
19	サインの伝達方法を選択する	22	サインの視認性を向上するためには、サインそのものの明るさほか、周辺環境の明るさとの関係がある。	・「視覚情報サイン」の配慮するポイントとして、サインの明るさと周辺環境との関係性について記載した。
20	サインの伝達方法を選択する	22	実際にデザインをする部分では、見せ方とその工夫が大切になるので、そのあたりを実務的な記載にするとリアリティーが出る。	・「サインの伝達方法を選択する」において、具体的に解説するほか、事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。
21	サインの表現方法	23	サイン計画に盛り込むのは難しいが、視覚障がい者にとっては、匂いもサインのひとつとなっている。	・匂いも重要なサインの一つと認識しているが、区が嗅覚をサインとしてコントロールすることが難しいので、今後の検討課題とする。
22	聞きやすさについて考える	25 26	聴覚による情報提供手段に関連して、JIS規格の音サインが仕様規程から性能規定に変更された。	・音サインの周辺環境において、建物の反射音などが無い空間づくりの必要性を記載した。
23	聞きやすさについて考える	25	聞き取りやすく不快に感じさせない音源というようなサインもある。「ひかりの杜」という施設で採用されているもので、音の専門家に話を聞いてみると事例として掲載できるかもしれない。	・事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。

No.	掲載場所	頁	意見	ガイドラインへの反映
24	触りやすさについて考える	27 28	国のガイドラインでも、触知案内の重要性は言われているが、そもそもどのように触知サインに行きつくのかわかるようなことがシステム化されていないのが現状である。そのため、視覚障がい者誘導用ブロックや手すりは有効なサインの一つである。	・触覚サインの一つとして、「視覚障がい者誘導用ブロック」や「手すり」などを紹介した。
25	理解しやすさについて考える	29 30	多言語化は重要だが、様々な言語を表示しすぎると見にくいものになる場合もある。組織名などの表示についても、課名までという考え方もあるし、係名までという考えもある。掲載する情報は施設や利用者の特性を意識して選ぶ必要がある。	・「理解しやすさについて考える」に「多言語」という項目を設け、多言語化の必要性和併記し過ぎることの弊害について記載した。
26	運用開始以降に考えること	31	このガイドラインは新設を意識した記載となっているが、既存施設の運用に活用する際に、読みやすい工夫が必要である。	・既存施設の管理者もガイドラインを活用しやすいように、「運用開始以降に考えること」という項目の中で、サインの維持管理の重要性、掲示のルールや掲示物のフォーマットの重要性などを箇条書きにして記載した。
27	運用開始以降に考えること	31	運用開始以降に考える順番としては、サインの維持管理、必要に応じた張り紙での対応、人による適切な情報提供、継続的な見直しということになるのではないかと。	・指摘を踏まえ、区としての重要性を加味して、記載順を変更した。
28	運用開始以降に考えること	31	運用開始以降の取組については、全施設が対象になる項目なので、具体的な事例（好事例や失敗事例）を紹介してあげるとわかりやすいのではないかと。	・事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。
29	人による適切な情報提供	31	サインを補足し、情報を適切に伝えていく手段は、人による情報提供のほかに、デジタルや館内案内のようなマップなどもある。	・「サインの伝達方法を選択する」の項目の中で、デジタルサイネージの効果について記載した。
30	掲示物	31	張り紙という表現がガイドラインになじまない。	・表現を「掲示物」に変更した。

No.	掲載場所	頁	意見	ガイドラインへの反映
31	掲示物	31	利用者から何度も質問される内容に目を向けるのが大切。利用頻度が高いものへの意見と低いものへの意見には違いがあるのかもしれないが、その辺りから好事例や悪い事例が抽出できるのでは。	・事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。
32	継続的な見直し	33	施設の運用開始以降、サインの過不足が見えてくる。その過不足を改善に生かせるようになると良い。	・「運用開始以降に考えること」の中に、「継続的な見直し」という項目を設けた。
33	継続的な見直し	33	既存施設は、色々試してサインを設置できるというメリットもあるので、試行錯誤する重要性を説明した方が良い。	・「継続的な見直し」の中に、実際の施設空間の中で使い勝手を確かめることの重要性を記載した。
34	継続的な見直し	33	施設の運用開始以降、サインの過不足が見えてくる。その過不足を改善に生かせるようになると良い。	・「運用開始以降に考えること」という項目の中で、課題に対する本質的な解決策を探り実現し続けることの大切さを記載した。
35	全体的	—	サインは、建築環境の中にあるという視点が重要。サインへのアクセスを考えると、照明計画などを含めた建築環境との関係性を整理する必要がある。	・「作成する前に確認すること」に「施設整備の計画段階からの検討」という項目を設ける。 ・「サインの取付方法を選択する」という項目に、周辺環境との調和を記載した。
36	全体的	—	良いデザインにするためには、当事者参加が必要である。	・「取り組みの姿勢」において、利用者を含めた関係者みんなで考える重要性とを記載した。 ・「継続的な見直し」において、利用者の要望に応える大切さを記載した。
37	全体的	—	読みやすいガイドラインにするため、イラストや写真、図などを入れると良い。	・協議会において素案が確定した段階で、イラストや写真、図などを追加して、ガイドラインの原案に反映する。

No.	掲載場所	頁	意見	ガイドラインへの反映
38	全体的	—	ガイドラインで仕様を事細かに示して基準化すればボトムアップにはつながるが、ユニバーサルデザインは皆が考えて取り組むことに意味があるので、このガイドラインのように、考え方を整理するというスタンスがとても良い。	・職員が考える契機となるようなことを目的にガイドラインを作成しているので、基準ではなく考え方を整理し、ユニバーサルデザインチェックやユニバーサルデザイン相談などを通じて、具体的な実践につなげていきたい。
39	全体的	—	施設を改善するためには予算が必要となるので、そのあたりを担保できるような仕組みがあると良い。	・公共施設の新築や改築などにおいては、本ガイドラインにそって障がい政策課が行っているユニバーサルデザインチェックの中で、ユニバーサルデザイン化の必要性を所管課に丁寧に説明することで、予算や人員の手配がしやすいようにサポートしていく。
40	全体的	—	新築時は、関係者も限定されるし、ある程度ユニバーサルデザイン化ができる。一方、既存施設では改善に経費や時間がかかるため、なかなか実践できない。そのため、既存施設において見直しする際やちょっとした工事を行う際に、少しでもユニバーサルデザイン化ができるようなガイドラインとなると良い。	・ユニバーサルデザインの実践に参考となる事例を多く掲載することで、新設施設にも既存施設にも参考となるようなガイドラインにしていく。
41	全体的	—	サインを文章で伝えようとする、どうしても文字が多くなるので、グラフィックを多用すると伝わりやすくなり、見た目も美しい。	・文章はなるべく端的にしたうえで、図や写真、イラストを使用していく。また、具体的な部分は事例集や資料編に掲載することで、理解しやすくする。
42	全体的	—	流れがわかりやすく良い。安心面・心地よさの記載はとてもよくできている。	—
43	全体的	—	ガイドラインにサインの作成に係る項目をこれだけ掲載しておけば、公共施設を受注した事業者にとっても目安となるので良い。	—

No.	掲載場所	頁	意見	ガイドラインへの反映
44	事例	—	発達障がい者の散髪はとても難しいという話を聞いた。 — 工程を絵で示したうえで、各工程で理解を得るという事例がある。	事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。
45	事例	—	サインが暗い、逆光などサインを見づらくする要因がまとまっていると、チェックしやすいのではないか。	事例集や資料編を作成する段階で掲載を検討する。